

アメリカの音楽療法のグリーフ・ケアに関する一考察 1970年代以前の文献からみる概念と手法

A Perspective of Grief-Care in Music Therapy of the United States Theory and Methods in the literature before 1970's

稲葉 チカ
INABA Chika

グリーフ・ケアは日本でも関心が高い。音楽療法におけるグリーフ・ケアは、理論的に欧米から影響をうけ日本の臨床上のニーズに合わせて発展してきている。アメリカの音楽療法のグリーフ・ケアに関する文献で、Journal of Music Therapy に最初に発表されたのは1977年のGilbertによる論文である。この論文は、その後のアメリカの音楽療法の臨床・教育に影響を及ぼしたと考えられる。ここでは、1977年以前のアメリカの音楽療法（または、医療などでの音楽の導入）におけるグリーフ・ケアについての文献を文献データベースで抽出し、論文の本文中に、死別喪失体験のグリーフ、あるいは、グリーフ・ケアに対する音楽の導入や効果に関する記述のあるものを選別した。結果は5報あった。各論文の内容を検証すると、グリーフケアの概念、導入方法、理論的志向に違いがあり、また時代の変化とともに考え方や導入手法に変容がみられた。最後に、グリーフ・ケアの概念の変化や音楽の手法について考察した。

The methods of grief care in music therapy in our country are appeared to be theoretically influenced by that of music therapy in the United States and other western countries. Then it has been developing to meet our needs on the clinical basis. In the Journal of Music Therapy, the first article related to grief-care was published in 1977: "Music Therapy on Death and Dying" by Gilbert. The purpose of this study is to find out the concepts of grief-care in music therapy and the clinical methods of music therapy for grief-care before 1977. Only 5 articles obtained and there were some differences but progressive changes are observed. In discussion, the historical background, the concepts of grief in music therapy, and music therapy methods for grief care are mentioned for further study.

Keywords:

Grief care, Terminal care, Music therapy, Theoretical orientation, Methods of music therapy

キーワード:

グリーフ・ケア、ターミナルケア、音楽療法、理論的志向、音楽療法手法

【背景と目的】

我が国で「グリーフ・ケア（悲嘆援助：以下グリーフ・ケア）」への関心は高く新聞やテレビなどでもよく見聞きするようになった。日本音楽療法学会が主催した第15回世界音楽療法大会では「Spotlight Session: Music Therapy and Trauma work（音楽療法とトラウマワーク）」のシンポジウムで、死に直面した人々への音楽療法についても取り上げられ^{1 2}、さらに文化や社会的ニーズに合った技法の発展が期待される。

日本の音楽療法は、明治時代から、精神医療の領域で、病院での治療に音楽鑑賞などが導入され、独自に発展し、さらに戦後に欧米のものが日本に持ち込まれて「現在の音楽療法」へと変容していったとの考えがある³。現在の音楽療法領域で死に直面している方々や遺族への心のケアは、精神医療と同様に、欧米の音楽療法の概念や思想が持ち込まれ、それが理論的な基盤となり、対象者や臨床のニーズに合わせて発展しているとも考えられる。日本の音楽療法のグリーフ・ケアの基となった欧米の音楽療法におけるグリーフ・ケアは、どのようなものなのか。

アメリカの National Association of Music Therapy（現 American Music Therapy Association, NAMT）が発行した研究雑誌 "Journal of Music Therapy" で、音楽療法のグリーフ・ケアに関する論考は1977年に初めて掲載されている。Gilbertによる、"Music Therapy on Death and Dying" である。この論文では、1975年に Duberey&Terrill が報告した "The loneliness of the dying person: an exploratory study" や1976年に出版されたにエリザベス＝キューブラー・ロスの "On Death and Dying" を援用し、死を目の前にした方々や遺族の音楽療法領域でのグリーフ・ケアへの可能性を説いている⁴。Gilbertのこの論文は、その後、アメリカの音楽療法の研究論文で多く引用されている^{5 6 7 8}。1950年（JMT1964）の設立から1977年までに、アメリカの音楽療法研究雑誌で、緩和ケア、ホスピスなどの臨床例や、グリーフ・ケアの文献は現時点でないことから、現在のアメリカの音楽療法領域のグリーフ・ケアの原点となる論文といえる。しかし、アメリカ音楽療法協会設立以前に、喪失体験による悲嘆の心のケアで音楽は導入されていなかったのだろうか。

本研究では「悲嘆ケアとして音楽が使われた文献」について、Gilbertの1977年の "Music Therapy on Death and Dying" 以前に書かれた文献を調べ、1977年以前のアメリカの音楽療法におけるグリーフ・ケアの概念、音楽の導入方法について考察することを目的とする。

尚、「音楽療法」という言葉の定義によって「いつの時代から、また、何が音楽療法かどうか」という線引きに相違があるが、その議論は本研究の論旨ではない。ここでは、アメリカの学会が設立以前のものも、音楽療法の変遷の範疇と捉えることとする。また、死別・喪失体験に基づく悲嘆援助のことを、悲嘆ケア・ターミナル・ケア、緩和ケアなど同義の用語を包括し、この論文ではグリーフ・ケアという言葉に統一する。死生学・心理学において、グリーフ・ケアは、死別のみならず、離別、また、対象は人だけではなく、愛着のあるものも含むが、本論では、人との死別体験によるグリーフ・ケアに限定する。

【方法】

英語論文データ・ベース PubMed で「Grief」または「Death」と「Music」または「Music Therapy」の4通りを検索し1977年までの論文を抽出、さらに、死別や喪失のケアと音楽について述べられている論文を選別する。選別方法は、Loss や Death というような言葉で表され、誰かを亡くした経験による Grief という意味が記述されていること、また、その人が持つ死別経験による悲嘆の苦痛を音楽によって緩和するような内容が記載されていることとする。もし、データ・ベースで文献が見当たらない場合には Davis, Gfeller & Thaut の『Introduction to Music Therapy』⁹を参考にする。この書籍は、アメリカ音楽療法学会から出版され、全米の多くの大学の音楽療法コースで教科書として使用されている。この本の第1章“Music Therapy Historical Perspective”（音楽療法の歴史）と第12章“Music Therapy In Hospice and Palliative care”（ホスピスや緩和ケアにおける音楽療法）の参考文献リストから、PubMed で検索した文献と同様の方法で抽出する。

【結果】

PubMed で、「Grief」「death」と「Music therapy」あるいは、「Music」と4通りを検索した結果、Obituary（訃報）や全く関連性を欠いているものを除くと、1977年までの論文は35報あった。そのうち、死別に関連する悲嘆に関する記述があるものは1報だけであった。次に、『Introduction to Music Therapy』の“Historical Perspective”からは1977年以前が11報、そのうち該当するものは4報だった。同文献の“Music Therapy Hospice and Palliative Care”の章には、1977年以前の文献はなかった。

これら合計5報は、出版年の古い順から①1804年のEdwin A Atlee¹⁰による“Inaugural Essay on the Influence of Music in the Cure of Diseases”、②1806年のSamuel Mathews¹¹による“On the Effects of Music in Curing and Palliating Diseases”、③1918年のEva A Veselius¹²による“Music and Health”、④1954年のEdward Podolsky¹³による“Music and Mental Health”、⑤1958年のLouis M. Brown¹⁴による“Music Therapy for Acute Grief”である。

次に、各論文で、論文の詳細（論文名、発行年、出版社、ページ数）、著者の背景、死別による悲嘆という意味でのGriefという言葉と音楽に関する記述の有無、グリーフ・ケアでの音楽の導入方法・症例、グリーフ・ケアでの音楽とケアの理論的志向（参考・引用文献）、その他の関連する内容について述べる。

- ① Edwin A Atlee 著 “Inaugural Essay on the Influence of Music in the cure of Diseases”（The University of Pennsylvania 所蔵 1804年 全19ページ）

“THE UNIVERSITY OF PENNSYLVANIA; FIFTH OF JUNE, 1804” “FOR THE DEGREE OF DOCTOR OF MEDICIN.” 記載があり、Atlee の、医学博士の学位取得のため

め、ペンシルヴァニア大学に提出された学位論文であることがわかる。よって、この論文が書かれたときには、Atlee はペンシルヴァニア大学医学部の学生であったといえる。

「Grief」について、1箇所の記事が見つかった。「悲嘆、あるいは、喪失 (Loss) による感情、あるいは、失望 (disappointment)」と記載されている。死別の喪失と明記されているわけではない。Loss には逝去・死別も含まれる。「グリーフの特質とし、消化不良、ヒステリー、心気症やメランコリーが頻出する」(p.11) の記事がみられる。が、音楽の導入法にはついて書かれていない。グリーフ・ケアに結びつけられるような症例もない。Atlee の音楽とグリーフ・ケアに関する情報は以上である。

Atlee は論文中にルソーなどを引用し、一般的に音楽には力があることを説明している。しかし、医療的・療法的効果に関連する理論は、誰の理論を参考にしたといった詳しい記述や引用・参考文献のようなものも書かれていないため、ケアの理論的志向は明らかではなかった。

その他に、音楽が人の精神に良い影響を及ぼしたという体験的な実例を3例あげている。1つ目は、メランコリーの知人女性に Atlee 自身がバイオリンを演奏した。演奏したのは、「彼女が小さい頃から好きだった曲」とある。鑑賞中だけではなく、鑑賞後も効果が持続したことが書かれている。次の事例も、若い女性である。彼女は鬱的で、ピアノを演奏することで、ヒステリーの症状が緩和した。最後の事例は、Mania の入院男性である。この男性は、自身にフルート演奏の経験があった。そして、好きなアリアをフルートで演奏してみるように促した。何曲か演奏するとすぐに心が落ち着いたという様子に Atlee は喜びを感じていたようだ。(p.17)

“Subsequent to the death of my former worthy preceptor, Dr.Edward Hand” という記述からも、前任の教官との死別を経験していたと推測できる。(P.1)

② Samuel Mathews 著 “On the effect of Music in curing and Palliating Diseases” (The University of Pennsylvania 所蔵 1806年 全19ページ)

「FOR THE DEGREE OF DOCTOR OF MEDICINE.” “ON THE 21TH DAY OF APRIL 1806” (p.1) と記載されている。1806年に、ペンシルヴァニア大学の医学博士の学位論文として提出されたものである。Atlee 同様に、当時、医学生だったといえる。

Mathews の論文で、音楽の Grief の緩和に関する記事については、「音は、死別による痛みを緩和する」との記載がある (p.17)。グリーフ・ケアでの音楽の導入方法や症例については述べていない。グリーフ・ケアの音楽効果に関する理論的志向については、具体的な記載はない。

音楽とケアに関する理論については、Professor Rush に関連する症例 (P.14) があげられている。Rush とはペンシルヴァニア大学の、Benjamin Rush のことだと推測できる。Rush は、精神患者に対する臨床を行い「精神医学の父」とよばれ、精神患者の治療に「音楽を導入する」提案もしたと言われている人物である¹⁵。症例を引用することから見て、Rush の影響を受けていたと考えられるだろう。

グリーフ・ケアとしてではないが、音楽の全般的な効果の一つに「患者の状態に合わせて音やハーモニーがアレンジされていないと、症状は悪化する」(P.12) と述べている。

このことは、患者の状態に音楽を合わせるということと解釈できる。

- ③ 1918年のEva A VesceliusによるMusic and Health. (雑誌「The musical Quarterly」
Vol.4 (3) . p.376-401に掲載. 全27ページ)

「Vescelius 女史は、"National Thrapeutic Society in New York City" の創設者・会長であった。1917年この論文を書き終え、暫くして逝去した」と注釈にかかれている。論文では、職業や credential (資格の証明となる略称) も見当たらないが、文章中に、「私と妹が合唱グループで歌っていたときに」(p.389) というように、歌唱に関する記述が多く、音楽家であったと推測できる。

Grief という言葉は使用されていないが、Death に関して、論文中の "Music as Poison" のセクションで、次のような記述があった。「病人にとって死の恐怖はいつも存在している」ので死の恐怖を増幅させないような選曲を強調し、「Darby and Joan や The Land of the Leal は、(中略) 内省的で恐怖に満ちている病人やうつ状態の人に対して歌ってはいけない。」「手術を受ける前の女性には (注意深く選曲しなければ) 致命的な影響を及ぼすかもしれない」「音楽の身体的・心理的作用の知識を持たない音楽家の訪問演奏」を例にあげ、そのような音楽家は「過度に感情を高ぶらせたり、死の恐怖を増長させたり、悲しい記憶を呼び起こすような悲哀に満ちた音楽を選んでしまうかもしれない」と批判している。死の恐怖心を持つ人への演奏をどのようにしたら良いかという手法は記載されていないが、死に対する複雑な感情を抱く患者への配慮や音楽の作用を理解するように注意喚起している。

他に、演奏に関する調査で、毎週日曜日に病院で訪問演奏する合唱団に参加した体験では、「適切な配慮がなく、だいたいの方が知っているだろう、という感覚で選曲し、ぶっつけで歌った」という経験は「音楽の悪事」と、その行為を否定し、「十分な実力」が必要であることを強調している (p.389-399)。医療の現場で患者に対する音楽活動を行う者は、実力に加えて、音楽の医療的な効果を熟知していなければならないという趣旨のことが何度も言及されている。「Musico-Therapy」という名称を使用している。Vescelius は、他に、熱、恐怖心、不眠などの症状に対して有効な音楽をあげている。

- ④ Edward Podolsky 著、" Music and Mental Health" (研究雑誌、「Mental Health」に掲載。1954年 全10ページ。)

本文の記載によると、Podolsky はアメリカニューヨーク州ブルックリンの医師である。この論文は、音楽の精神面への作用について書かれていて、特に悲嘆がテーマではない。が、音楽が血圧や心拍に影響する為、「Jealousy が憎しみからきているものであれば音楽の導入に利点がある」と述べ、続いてグリーフに関する記載は、「Jealousy (嫉妬・ねたみ、憎しみ) とは、怒りや恐れや愛と同様に、人間の生活を占めるもの (中略) で、Jealousy は、愛する人を喪失した時に生起する悲嘆感情で構成されている」(p.104) という見解を示している。「Jealousy は、誰もが望まない感情」で「この痛みをどうしたら和らげることができるのか。(中略) Jealousy を幸福で心配事のない (心理) 状態へと促すような、

新しい活力を与える力が音楽にはある」としている (p.105)。死別とも離別とも両義的な喪失ともとれる。症例、理論的志向について、認められるものはなかったが、Podolskyは、「鑑賞も良いが、もし、(患者本人が)演奏ができればもっと効果がある」と述べている。気持ちを落ち着かせて、感情を変容させるために、鑑賞用に30曲近くの推薦曲が掲載されている。グリーフに関してというわけではなく、全般的な音楽の有効な技法として、Altshulerが提唱したISO-Principle(同質の原理)を引用している(p.107)。

⑤ Louis. M. Brown の “Music Therapy for Acute Grief” (Podolsky 編 書籍「Music Therapy」に掲載。1954年、全5ページ)

Edward Podolsky 編著で1954年に出版された書籍「Music Therapy」に掲載された論文である。Contributor(寄稿者紹介)には、「Brown, Louis M, M.A., Music Therapist, Brooklyn, N.Y.」と記載され、Brown氏が修士の学位を持っているミュージックセラピストであったということはわかるが、この記述意外に、詳細のわかる記載がないため、所属施設などは一切不明である。また、Brown氏の他の論文は検索したが発見できなかった。

論題の通り、急性の悲嘆反応が取り上げられている。Brownは、急性の悲嘆に、「頻繁にため息をつく」「疲弊すること」「食欲がなくなる、食べものの味がしなくなる」「死別した人のイメージで頭がいっぱいになる」「物事を始める気がしなくなる」「行動に変化がみられる：不休、やる気がなくなる、多弁になる、長い間ふさぎ込む」というような症状が現れると記載している。参考にした文献は書かれていない。

このような急性の悲嘆の症状を呈した2症例に対する個人音楽療法の事例が掲載されている。一人は、妻を交通事故で亡くした男性、次に、子供を亡くした女性である。男性は、食欲がなく、ずっと引きこもっていた。また、喉に何かつまっているような感覚や胃痛などがあった。女性は、ずっとその子供のことを話したり、突然泣きじゃくり、ずっと泣いているという(泣き発作のような)様子がみられている。食事はとらず、体のあちこちに激しい痛みを感じていた。それぞれ、音楽療法が施され、男性は1週間半で、女性は2週間でこのような急性の悲嘆が緩和したと報告している。また鑑賞用に使用された音楽が各20曲以上リストアップされている(p.132)が、音楽療法の構造、導入、手順、解釈や言語交流の様子などの記載はない。

しかし、上記2症例は、鑑賞の手法が使われていたが「もし、可能であれば患者本人が歌唱することや、楽器の演奏ができるとより良い」(p.133)と奨励している。特に、歌唱は、「閉じ込められた感情に空気の入替えをする」「歌うと、ため息をつくような感じになり、悲嘆による嘆きや苦痛を完全に取り去る」という。また、調性についても言及し、「音楽は、悲嘆を和らげ」より良い情緒への調整へと道筋をひらく最高の手法だとし、「悲嘆のような極端な悲しみを乗り越える手段は、音楽の他にはない。」(P.131)と述べる。

【考察】

アメリカの音楽療法におけるグリーフ・ケアについて、1977年以前の文献を調べたところ、5報の論文が見つかった。それらについて、論文の掲載雑誌やページ数や著者の詳細、Griefと音楽に関する記述、音楽の有用性、実例、実体験、音楽とケアの理論的志向に違いがみられた。次に、グリーフの概念、グリーフ・ケアとしての音楽の導入方法と理論的志向について考察する。

アメリカの音楽療法領域におけるグリーフの概念について

年代を比較すると、Atlee論文が1804年、Mathews論文が1806年、Vesceliusが1918年、Podolsky論文が1954年、Brown論文も1954年である。Davisによると、アメリカ音楽療法で、音楽と健康に関連する最古の文献は、著者不明の1789年のColombian Magazine¹⁶であるが、死別に関する記載はなかった。Mathewsは明確にdeathと記載しているが、Atleeの書いたLossというのが、死別を含むものとして確定できれば、音楽療法のグリーフ・ケアに関する記述のある文最古の文献だろう。

「アメリカの急性の悲嘆のグリーフ・ケアの研究で嚆矢となった¹⁷」のは、Erich Lindemannで、「Symptomatology and Management of Acute Grief」を1944年に発表した。それ以前には、Freudが、Mourning（悲嘆）について「Mourning and Melancholia¹⁸」を1917年に発表している。1800年ごろに書かれたAtleeとMathewsの論文では、グリーフ・ケアという言葉が当時存在しなかったのは当然であり、当時の医療で「死を扱うことについて」肯定的な態度であったかは疑問が残る。今後詳しい調査がされるべきではあるが、いずれにしても、この二つの文献からいえるのは、1800年ごろには、すでに死の喪失の悲嘆を音楽が和らげる、ということが認識されていたといえるだろう。

次に、1918年のVesceliusでは、死の恐怖を抱える人たちに対して音楽が適切に提供されないと、「Music as Poison（音楽は毒にもなる）」と述べている。彼女の論文では、「悲しい思いを思い出させること」「死への恐怖を増長させること」は良くないことと認識しているように読み取れる。特に、歌ってはいけないとした、Darby and Joanは仲むつまじい老夫婦の歌、The Land of the Lealは、死別がテーマとなっている曲である。何の意図もなく、何も考えずに、老いや死別がテーマとなっている曲を歌うのは（死別にかかわらずどんな領域でも）良くないのは現代の音楽療法では当然のことである。しかし、当時もどうしてそう考えたのか。その理由は記載されておらず、今後調査することで、音楽に当時の死生観やグリーフ・ケアの概念が現れてくるかもしれない。

さらに、1954年のPodolskyとBrownの論文である。特に、BrownのAcute grief careについて言及すると、この10年前に、前述のLindemannの急性の悲嘆反応に関する論文「Symptomatology and Management of Acute Grief」（1944年Journal of Psychiatryに掲載）が発表されている。この論文は、Lindemannが、101人の対象者から急性の悲嘆反応についてまとめたものである。対象者の属性は、治療中に身内と死別した精神病患者、病院で死亡した患者の家族、火災事故で死別した犠牲者の遺族、軍人の遺族などである。正常な悲嘆反応のプロセス、病的悲嘆反応に遅延反応や歪曲反応など分類によって詳細に説明されている。Lindemannは、急性症状の特徴に、「ため息のよう

な息づかい」「疲弊する」「食べ物は砂を噛んでいるよう」「食欲をなくす」「死者のイメージにとらわれる」などをあげている。これらは、ほぼ、Brown が示した急性の悲嘆症状「頻繁にため息をつく」「疲弊すること」「食欲がなくなる、食べものの味がしなくなる」「死別した人のイメージで頭がいっぱいになる」「物事を始める気がしなくなる」「行動に変化がみられる：不休、やる気がなくなる、多弁になる、長い間ふさぎ込む」とほぼ同じである。このようなことから、Brown が Lindermann の急性悲嘆の理論から影響を受けていたと推測できる。あるいは、当時、Lindermann のいう悲嘆が、医療や社会に受け入れられていた理論だったのだろう。

本論の冒頭で述べた、1977 年の Gilbert の「Music Therapy on Death and Dying」は、論題からもキューブラー・ロスの影響を受けていた。Gilbert は、Podolsky や Brown から、約 20 年余り後になる。この間、イギリスのソングスによるターミナル・ケア運動¹⁹が活発になり、アメリカでも、徐々に広まった。Fulton と Owen²⁰によるとアメリカでターミナル・ケア運動が広まった一つの理由として、キューブラー・ロスがアメリカで受け入れられていたことも大きな要因の一つだとしている。本文の調査からも、その影響がアメリカの音楽療法領域にもあったと言えるだろう。

グリーフ・ケアとしての音楽の導入方法と音楽とケアの理論的志向

Atlee と Mathews がペンシルヴァニア大学の医学生であった 1800 年ごろというと、精神医学の父といえる Benjamin Rush の影響を否定できない。Rush は、ペンシルバニア病院（1752 年設立）²¹の医師・教授、精神科治療で活躍、人道的な治療を取り入れたと言われ、彼の著書「Observations and Inquiries Upon the Diseases and Mind」（1812 年）はアメリカで最初の精神医学の教科書となり、「精神医学の父」と呼ばれている²²。Mathews は、Rush の患者の例をあげたが、Rush が治療的な音楽の効果を臨床研究していたかは確認できなかった。Davis&Gfeller²³は、二人が Rush の影響を受けていると述べているが、Atlee1804 年 と Mathews が 1806 年に博士論文を提出しており、Rush の著書が 1812 年の出版となると、出版物の時系列からみればつじつまが合わない。しかし、ペンシルバニア病院の紹介文²⁴では、Rush は「音楽鑑賞を患者に奨めていた」としている。当時医学生だった二人が、教官の許可なしに勝手に患者に音楽を導入したとは考えにくく、病院設立者で医学部教授の Rush の影響をうけていたことは想像できる。もし、Davis&Gfeller の述べるように、Rush の影響を実際に受けていたとすれば、Rush が音楽をペンシルバニア病院の導入はアメリカの医療で音楽療法で一番最初に臨床を行った人物と言えるかもしれない。今回の調査では、Rush が導入していたということは Mathews の論文の中に引用されていただけであるため、立証するためには、今後、Rush が音楽を治療に取り入れていたことを示す情報が必要だろう。

Vescelius 論文では、「死への恐怖を抱いている」ため「恐怖を増長させないように」「配慮が必要だ」「音楽は毒にもなる」と警告している。しかし、悲嘆を扱うための音楽については言及していない。Atlee から Vescelius の論文までの間およそ 100 年間ある。Davis によると 19 世紀には、聴覚障害児などへ教育現場での音楽療法が開始した。また、ブラックウェルズ島の精神病者の施設での音楽演奏、さらに、精神病患者に対する治療と

して音楽の研究、Corning,J.Lによる実証的研究など、音楽の療法や治療に関する臨床研究が進んでいた²⁵。Vesceliusの論文で自身が精神病院への訪問演奏をしていたことが記述されていることから、医師や教育者だけではなく、音楽家にも、音楽の治療的側面や健康増進としての音楽の関心が広まりつつあったと推測する。

さらに、VesceliusからPodlskiやBrouneまでの20年間は技法や考え方がさらに進んだ。Lindermannの論文が報告された1944年から10年後の1954年発表されたPodolskyとBrownの論文は、音楽の鑑賞についてレパトリーを示し、心拍や血圧への影響や科学的な心身へのメリットをあげている。ともに、鑑賞も良いが、できれば患者自身が演奏するような音楽活動を行う方が良いとしている。特に、Brownは、歌唱に悲嘆反応の効果を見出している。現代の音楽療法のグリーフ・ケアでの有用性を検証する余地はあるだろう。

音楽療法のグリーフの概念も時代背景や社会運動の移り変わりや臨床研究の発展とともに変化していったように、音楽の導入方法についても技法が発展していった。音楽の導入は、どの論文でも、「患者に合わせる」「患者の感情や状態に配慮する」ことを繰り返し述べている。これは、一貫して、現在も当たり前と考えられている音楽療法の考え方である。音楽家や医師の方に主体があるのではなく、音楽が音楽療法を受ける側にあることは、1800年代から変わらない音楽療法の態度といえる。

【おわりに】

今回は、5報の論文という数の少ない文献研究となり、全貌を示すことには限界があり、さらに詳細に調べる必要がある。アメリカでの音楽療法でのグリーフ・ケア、治療に音楽を導入することは1977年時点で突然始まったのではなかった。概念や音楽の導入方法が違って、悲しみ苦しむ方々へのケアとして音楽の利用を模索してきた先達の姿が垣間見れた。日本ではどうだったのか。ソングズ提唱のターミナル・ケアを日本に導入した柏木²⁶によると、「ターミナル・ケア」は日本の医療の考え方を変えたが、今後は、日本独自のものが発展する必要があるという。

喪失による悲嘆は、ターミナルケアやホスピスという施設だけに留まるものではない。また、死を目の前にした人だけではなく、遺族や友人や取り巻く人々に関連するものである。死や喪失は誰にでもある事象である。ターミナルケアやホスピスという領域に限らず、我々の文化の中ではどのように扱ってきたのか、音楽がどのようにグリーフ・ケアの一端を担えるか、臨床で活かしていけるよう、今後も調査していきたい。

【参考・引用文献】

- ¹ 音楽療法学会 <http://www.jmta.jp/news/2015/150511.html>
- ² The 15th World Congress of Music Therapy. “Congress Program” P.49-51. 2017
- ³ 幸 絵美加 「日本の精神病院における音楽療法史の探求 第2報 大正時代」『音楽療法JMT』vol.11 日本臨床心理研究所. 2001
- ⁴ Gilbert, J.P. “Music Therapy Perspectives on Death and Dying”Journal of Music Therapy, Vol.14 (4), National Association of Music Therapy. 1977. P.165-171.
- ⁵ Levine, J & Swarts, R. “The Effect of Music Therapy on Anxiety in Chronically Ill Patients” Journal of Music Therapy, Vol.2 (1), National Association of Music Therapy,1982. P.43-52
- ⁶ Froehlich M.A “A Comparison of the Effect of Music Therapy and Medicine Play Therapy on the Verbalization Behavior of Pediatric Patients” Journal of Music Therapy,Vol.21 (1),National Association of Music Therapy.1984,p.2-15,1984.
- ⁷ Bartlett, D., Kaufman, D et al. “The Effects of Music Listening and Perceived Sensory Experiences on the Immune System as Measured by Interleukin-1 and Cortisol” Journal of Music Therapy. Vol.30 (4),National Association of Music Therapy. 1993, P.194-209.
- ⁸ Wolfe, D.E., O’Connell,A.S., et al “A Content Analysis of Therapist’s Verbalizations During Group Music Therapy: Implications for the Training Music Therapists” Music Therapy Perspectives, Vol.16 (1). National Association of Music Therapy. 1998, P.13-20.
- ⁹ Davis.WB.,Gfeller,K.E.,& Thaut,M.H. Introduction to Music Therapy. American Music Therapy Association. 3rd.ed.2008.
- ¹⁰ Atlee, E.A. “An Inaugural Essay on the Influence of Music in the cure or Diseases” The University of Pennsylvania. 1804.
- ¹¹ Mathews, S. “On the Effects of Music in Curing and Palliating Diseases”The University of Pennsylvania,1806.
- ¹² Vescelius E.A “Music and Health” The Musical Quarterly. No.4 (3) .1918, P.376-401.
- ¹³ Podolsky E.”Music and Mental Health” Mental Health,Vol.13 (3) ,1954. P.99-109,
- ¹⁴ Brown L.M “Music Therapy for Acute Grief”:Podolsky:Music Therapy. Philosophical Library NY. 1954. P.130-134.
- ¹⁵ Penn Medicin:History of Pennsylvania Hospital. Historical Timeline. Dr.Benjamin Rush. <http://www.uphs.upenn.edu/paharc/timeline/1751/tline7.html>
- ¹⁶ “ Music Physically Considered” Colombian Magazine. 111, 1789,p90-93.
- ¹⁷ 平山正実 『死生学とはなにか』1991.日本評論社. P.22
- ¹⁸ Freud,S “Mourning and Malancholia” Collected Papers. Vol.1 (4) ,1917,p.152-170.
- ¹⁹ Saunders,D.C,Suumer,D.H.et al. Hospice,the living idea. Edward Arnold Ltd.1981. (岡村昭彦『ホスピスその理念と運動』雲母書房)
- ²⁰ Saunders,D.C, Summer.,DH et.al:前掲書. P.33.
- ²¹ Penn Medicine: History of Pennsylvania Hospital,Historical Timeline 1751-1800. <http://www.uphs.upenn.edu/paharc/timeline/1751/>
- ²² Penn Medicin:History of Pennsylvania Hospital. Historical Timeline. Dr.Benjamin Rush. <http://www.uphs.upenn.edu/paharc/timeline/1751/tline7.html>

- ²³ Davis,W.B&Gfeller. K.E. “Music therapy:Historical Persopective”Davis.WB.,Gfeller.,K.E.,& Thaut,M. H.: Introduction to Music Therapy. American Music Therapy Association. 3rd.ed.2008, P.17-39.
- ²⁴ Penn Medicin “History of Pennsylvania Hospital.Historical Timeline” 前掲
- ²⁵ Davis. WB&Gfeller 前掲論文
- ²⁶ 柏木哲夫・栗林文雄『ホスピスのこころを語る 音楽が拓くスピリチュアルケア』2006. 一麦出版.

